

## 京都大学「ライフサイエンス」研究シンポジウムに参加

金子 昭

4月13日、京都大学白眉センターと応用哲学・倫理学教育センター主催のシンポジウム「ライフサイエンスの現場と政策的・倫理的課題～生殖・再生医療の現在」に、深谷忠一所長とともに参加した。白眉センターとは、平成21年、京都大学内に設立された次世代研究者育成支援事業（旧名称：次世代研究者育成センター）の名称である。

第1報告は、大串素雅子氏（京都大学白眉センター特定助教：基礎医学研究）が「生殖細胞研究の現場から」として発題。大串氏はマウスの生殖細胞を研究して「発生」の仕組みを研究している。報告の内容は、発生のメカニズムを図解で説明しながら、ES細胞からiPS細胞についての研究の流れを分かりやすく解説するものだった。生殖医療（発生学研究）の現場にとって、iPS細胞から次世代につながる生殖細胞を作ることができたということは、なによりも生物学の常識をくつがえすものであると強調した。

第2報告は、八代嘉美氏（京都大学iPS細胞研究所上廣倫理研究部門特定准教授）による「iPS細胞と研究『エシックス・トラブル』」の発表。八代氏は、かつて東大医科研で造血幹細胞の研究（遺伝子を探して造血幹細胞を作製）をしていた。iPS細胞はさまざまな常識を変える「装置」であると、その意義を高く評価。その一方で、山中教授のiPS細胞樹立は生理学上の基礎研究という点でノーベル賞が授与されたもので、過剰な期待はかえって混乱をもたらすことにもなりかねないとも指摘した。

第3報告は、菱山豊氏（文部科学省大臣官房審議官：研究振興局担当）が「ライフサイエンスに関する規制の枠組みの現状と課題」について行った。菱山氏は文部科学省で新規の研究分野の審議に携わり、科学政策決定の実務に従事している。報告では、政府は今後10年間で1,100億円の支援をiPS細胞研究に助成することに決定したことをはじめ、国による生命倫理関係の法律や指針について紹介。安全規制については、基準の作成は比較的容易であるが、倫理的規制については社会的合意も必要であると指摘した。

この後、質疑応答が行われた。伊勢田哲治氏（京都大学文学部准教授：倫理学・科学哲学）による指定質問の後、会場からの質問用紙を用いたやり取りとなり、iPS細胞に関する専門的な内容から、ヒトの生殖細胞研究における倫理問題、また政策決定にいたる審議会の議論のあり方など、広範な話題が取り上げられた。

このシンポジウムでは、現場の研究者（大串氏）、政策決定の実務担当者（菱山氏）、両者を橋渡しする研究者（八代氏）と、それぞれのパネリストによる立場からバランスのとれた有意義な学際的討議がなされたように思う。ここでの議論に、iPS細胞が人間生命の尊厳や自然の摂理にどこまで適合するかも含めて、宗教倫理がどのような形で関与していくことができるか、また天理教的立場からライフサイエンスの問題に何をどういう形で発信できるかなど、多くのことを考えさせられた。

## 第259回研究報告会（4月15日）

バークレー留学体験の社会的な解釈

深谷耕治

本発表では、米国カリフォルニア州のバークレー大学院神学連合（GTU）での私の留学体験の社会的な解釈を試みた。

GTUは9つのキリスト教の神学が所属する大学院の教育機関であり、全米でもリベラルな雰囲気満ちたバークレーという街に相応しくカトリック／プロテスタントを問わず様々な教派に属するキリスト教徒が在籍し、またイスラーム研究やユダヤ教研究も盛んに行われ、さらには浄土真宗の教育機関とも授業の単位交換をしており、「宗教が複数存在する」という事実を目の当たりにする場所である。そして、そこでは他宗教をいかにして理解するかということが実践的な問いとして現れる。

これまで他宗教理解に関しては典型的に示されており、イギリス人神学者であるA・レイスの宗教排他主義・宗教包括主義・宗教多元主義の3類型や、異宗教間で飛び交う言説の中身に注目したイエール大学の神学者であるG・リンドベックの「認知的・命題的な」「経験的・表現的な」「文化的・言語的な」宗教理解の3類型が標準的であるが、とりわけリンドベックの「文化的・言語的な」宗教理解は同じくイエール大学で博士号を取得した哲学者R・ローティの「リベラル・アイロニスト」論と類似しており、その枠組みは「アメリカ」「バークレー」「GTU」という三層の状況を理解するのに大変役立つ。

ローティが唱える「リベラル・アイロニスト」とは、「自らにとって大切な信念や欲求を正当化するための一群の語彙に対してラディカルで継続的な疑いをいまく者、自らの語彙の偶然性・可謬性を自覚する者」（アイロニスト）であると同時に、「残酷さ（cruelty）を私たちがなしうる最悪のことと考える者（リベラリスト）」であるような立場であり、それは暴力によらず言葉によって説得しようとする態度、つまりコミュニケーションの内外を問わず、異質さや差異にたいしてオーバーリアクションをしない「寛容」を特徴とする。

そして、その立場はレトリックを重視するソフィストに近似しており、言語と非言語との間に成立する関係（基礎づけ）を認めず、したがって例えば「神がある」という命題を真にするような非言語的な「事実」の存在も認めず、「神がある」という言明の有意味性はその「言語ゲーム」のルール（コミュニケーションの目的）が決定されるとする（正当化）。

GTUで体験した状況は、まさにこのようなりンドベック＝ローティ的な枠組みで捉えることができる。例えばプロテスタントの説教では「基礎づけ」ではなく「正当化」が試みられ、説教者が「神を感じた」という経験や内容を述べる時は必ずといっていいほど「聴衆の皆さんはどう思うかわかりませんが、私にとっては十分に真実と思えました」と断りを入れている。そして、このようにして自身の体験を解釈してみると、「宗教が複数存在するという状況の中、信仰者はソフィストでいいのか？」というより根本的な問いが立ち上がるのは必至だ。ただ、そのような課題を抱えつつも、そこではレトリックに親しむ人々が言語ゲームに興じているという状況認識は必要であろう。